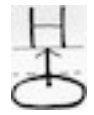




さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.20

2020

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (15)

道を求めるころ (その2) 6

岡本英夫

真の善知識とは

さて、最後の場面を見てみましょう。

五十三番目の善知識は弥勒菩薩です。弥勒菩薩は善財童子に、求道において重要なことを教えます。「善知識」です。先生(師)のことですね。善知識といえば、すでに童子は五十余人の師を訪ねて教えを聞いてきたわけです。しかし、弥勒の視点は違います。真の善知識を確認することの重要さなのです。弥勒菩薩は童子に告げます。

「汝今より文殊菩薩のもとへ行き、菩薩の行(*1)を尋ねるがよい。文殊はじつに汝の善知識である。先に多くの善知識に遇って菩薩の行願(ぎょうがん)(*2)を訪ね得たことは、皆文殊の威神力(いじんりき)(*3)のためである」

これは感銘深い言葉ですね。善知識をたくさん尋ねることができて、いろいろ教えを聞くことができた。しかし、求道とはそれでいいのだろうか。弥勒はその十分さを知っているのです。だから童子に実の真の善知識を知らせようとしています。

お前が多くの善知識を訪ね得たことは、文殊菩薩の大きなお力のゆえなのだ。お前



木のもとのお話(20)

教えを
聞いていくことによって
次第に
自分の本当の姿に
目が覚めてくるのです
真実の
お釈迦様のお教えによって
私たちが
煩惱に溢れる自分自身に
気がつくとき
南無阿弥陀仏は
私という存在のすべてを
挙げての声となるでしょう

の人生の全体を大きく見て道を示し、善知識を紹介し、仏法の廣大無尽の世界を歩ませたのは文殊なのだ。お前の人生の全体を仏法の眼でしっかりと見ていてくださるお方がいたのだ、と。それが真の善知識なのだ。

童子の歩みのすべてを褒める善知識

それを聞いて童子は文殊菩薩に会いたい思いが起こります。

「善財童子はかくの如く百十城に経游（けいゆう）して、普門城（ふもんじょう）のほとりに到り、思惟してそこに住みし、十方を觀察して一心に専ら文殊菩薩を求む。いかにもしてまのあたり慈顔（じがん）に会いたてまつりたい」と。

その時文殊は、遥かに手を伸べて、百十由旬（ゆじゆん）の距離を経て、普門城の善財童子の頂きを撫でたのだと。

じつに面白い表現です。文殊が手を伸ばして童子の頭を撫でる。「童子」だから撫でるという表現になっているのでしょうか。手を伸ばした距離は百十由旬とあります。計算してできないことはないのですが、そういうことではない。百十という数字は、童子が善知識を求めてこれまで訪ねてきた場所を表すのです。百十の城を訪ねたのだと。その数字と合わせたのです。

すなわち、文殊の手は、文殊がいるところから普門城の童子までの直線距離を伸ばしたのではなく、童子が訪ねた百十の城のあとをずっと確認して伸び、童子の歩みのすべてを確認して、善財童子よ、よく歩んだな、よくやったぞと、その頭を撫でたということでしょう。いかに文殊菩薩が、童子の人生のすべてを見る善知識であるかがよく表されている表現だと思います。

- *1菩薩の行...人々のために尽くし(布施)、自らの力を培っていく(正しい心と生活と仕事)
- *2菩薩の行願...人々に救いの道に立ってもらおうと願いはたらきかけること
- *3威神力...仏の大慈悲が持つ真実の力

